

学位請求論文審査報告書

氏名 村上 無量
論文題目 「我一心」の自覚道—法蔵願心への呼応—
審査委員 主査 大谷大学教授 一楽 真
博士（文学）[大谷大学]
副査 大谷大学教授 井上 尚実
Ph.D. [University of California]
副査 大谷大学教授 織田 顕祐
博士（文学）[大谷大学]
副査 大谷大学名誉教授 延塚 知道
博士（文学）[大谷大学]

I. 論文内容の要旨

本論文は『「我一心」の自覚道—法蔵願心への呼応—』というテーマで、本文 108 頁、註 56 頁からなる。論者がこれまで積み重ねてきた研究をまとめており、親鸞が顕らかにした浄土真宗という仏道の内実を究明することを主題としている。特に「雑行を棄てて本願に帰す」と親鸞が表明する信心がどのような内容をもつかを尋ねることに重きを置いている。その際、世親が「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」と表明する「我一心」に注目して、信心の獲得が仏道における信仰主体の確立であるという視点から考察を進めている。

問題関心の根底には、仏道と言いながらも仏道でなくなっていく問題、あるいは仏教の看板を掲げながらも内実が伴わないという問題が見据えられている。それ故、親鸞の顕らかにした仏道について尋ねることは、自分自身が仏道を歩むという主体の問題を究明することに自ずからつながっていく。

本論文は、このような自らの求道的関心をベースにして、聖教を丁寧に読み解いていこうとする姿勢が一貫しており、特に仏道の歩みという実践的課題に重点が置かれている。

全体の構成は以下の通りである。

序

第一章 我一心—主体の確立と信の救済—

第一節 回心—師教との値遇—

- 第一項 親鸞が求めたもの
- 第二項 求道における「選び」の意義—
- 第三項 本願念仏が開く自覚—自力無効—

第二節 本願成就

- 第一項 真実教の決定
- 第二項 第十一願成就—大涅槃の現働—
- 第三項 第十七願成就—諸仏の称名—
- 第四項 第十八願成就—正定聚の機—

第二章 我一心の展開―帰命から願生へ―

第一節 三一問答の意義

第二節 本願の名号―大行―

第三節 至心―絶対真実の智慧―

第四節 信楽―如来大悲の絶対否定―

第五節 欲生―「我」の根本本体―

第六節 願生浄土―浄土の真証―

第三章 我一心の自覚道―真仏弟子の歩み―

第一節 金剛心―仏道を歩ませる純粹意欲―

第二節 金剛心の利益―撰取不捨と現生護念―

第三節 宿業と大悲―衆生の疑念とその超克―

第一項 不定聚の機―仏智疑惑の問題

第二項 願海転入の自覚―懺悔の一念に仰がれる果遂の誓―

結

全体は三章立てで、第一章は「我一心―主体の確立と信の救済―」と題して、親鸞における信心獲得の契機である法然との出遇いの内実を「回心」と「本願成就」という二つの視点から確かめている。第二章は「我一心の展開―帰命から願生へ―」と題して、「本願に帰す」という目覚めを衆生に引き起こす根源のはたらきである法蔵菩薩の願心について尋ねている。第三章は「我一心の自覚道―真仏弟子の歩み―」と題して、信心獲得において開かれる仏道の歩みの具体相および実際の意義について尋ねている。以下、簡単にその内容について触れておく。

第一章では、親鸞が浄土真宗という仏道に立つ決定的な契機が法然との値遇であるという見定めのもと、親鸞が求めていたものが何であるかを尋ねている。その上で、値遇がもつ意味を『大経』に説かれる釈尊と阿難の値遇と重ねて、本願の道理として述べている。そして本願成就の具体的事実を世親の「我一心」として押さえ、「我一心」の根源にはたらく法蔵菩薩の願心を次の第二章で尋ねていくという展開である。

第二章は、最も多くの頁を割いて、『教行信証』「信巻」の三心一心問答を通して、「我一心」の内実を考察している。三一問答は基本的には親鸞における一心帰命の信についての推求であるが、その際に本願成就文が二つに分けて引用されていることに注目し、一心帰命が一心願生へと展開することの意義を尋ねている。その上で、如来が衆生を招喚する「欲生」の願心こそが、「我一心」の根本本体であると述べている。

第三章では前章を承けて、「真仏弟子の歩み」というサブテーマのもと、仏道における歩みの実際について考察している。その際に、仏道を歩む主体を成り立たせるのが「金剛心」であるとし、金剛心の内実とその利益について尋ねている。さらに、仏道の歩みにおける衆生の自力執心を取り上げ、その超克を「果遂の誓」のはたらきに見ている。

結では、親鸞が顕らかにした仏道の歩みは、不断の聞法であり、それが同時に法蔵願心への呼応であることを述べている。

II. 論文審査結果の要旨

本論文は、『教行信証』「信巻」を中心にして、親鸞が顕らかにした仏道と、その歩みの実際について尋ねている。大谷大学大学院で五年間学んできた成果をよくまとめて形にした論文であると言える。聖教を丁寧に読み解いていこうとする姿勢に貫かれ、論者独自の見解も随所に見られる。

まず評価すべきところは、親鸞における教えとの出遇いが、本願の道理としてあらゆる衆生に開かれていることを確かめている点である。これは親鸞自身によって「本願成就」として押さえられていることではあるが、それを論者は第十一願成就、第十七願成就、第十八願成就と順を追って丁寧に尋ねている。特に第十一願成就を「大涅槃の現働」と捉えて、元来は無為法である涅槃が、本願の名号として衆生に働き出してくることを確かめている。

次に、「信巻」の三一問答について確かめるところでは、至心、信楽、欲生の三心に通じて衆生の現実相が説かれていることに注意し、それを「如来大悲の絶対否定」と押さええている点である。この人間観は浄土教、さらには親鸞の仏教における根本的視点と言える。我が身に何らかの可能性を置く限り、如来の願心のはたらきがあっても届かない。また、誰においても平等の救済ということも成り立たない。論者は親鸞の人間観をしっかりと押さえるところに、浄土教の必然性を明らかにしていると言える。

次に、「真仏弟子」について述べる中で、特に「金剛心の利益」として仏弟子の歩みを押さえようとしている視点は大事である。中でも、利益の実際が「摂取不捨」として誰の上にも平等に成り立つこと、また「現生護念」として現生における利益であることを論じている。これは親鸞の仏教を考える中で重要な課題である。

このように、従来からの問題を取り上げながらも、論者独自の切り口で親鸞における真実信心の内実が確かめられている。

これらを踏まえた上で、口述試問においては、さらに課題となる点、また不明瞭な点などについて確かめた。以下に主なものを記す。

- 1、 真宗学の専門的論考という意味では、先行研究もふまえて大へんよくまとめられている。ただ、他分野の人が読んでも課題が伝わるようにする努力が今以上に必要であろう。
- 2、 文字数制限のある中で、どうまとめるかは難しいところではある。本文で述べられるべきところまでが註に回されている印象を受ける。
- 3、 「真仏弟子」を取り上げる際には、「金剛心の行人」という面とともに、「必可超証大涅槃」ということも併せて考える必要がある。今後さらなる考察が進むことが期待される。

以上のように、本論文はさらに一步踏み込んだ論考が望まれる箇所もある。しかしながら、丹念に資料を収集し、丁寧な読み込みを通して、親鸞が明らかにした真実信心を確かめるという意味においては優れた論文である。そのことは口述試問における質疑応答を通して十分に確認することができた。

審査に必要な最終試験については、審査員全員により 2020 年 1 月 22 日に試問を行った。その結果、審査員一同一致して、村上無量に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当と判断した。